女幹部メル様の
セカイ征服計画!

高岡智空
挿絵／鈴眼依縫

あとみっく文庫

立ち読み版

CHARACTER

悪の秘密結社【マリシュ・ベネヴォール】

メルティーナ

悪の秘密結社『マリシュ・ベネヴォール』の幹部。家事万能で料理好き。温厚派ながら、作戦を立てていて熱くなると常識に囚われなくなることも。

キサラ

鳥人間タイプの怪人。近接格闘担当。ちょっと口調は乱暴ながら、心優しく真面目で元気な少女。

コロナ

悪魔タイプの怪人。頭脳担当。委員長系でクール、頭脳明晰。けれど恥ずかしがり屋な可愛い所も持つ。

ロギス

狼男型男怪人。人間状態の見かけはオシャレでイケメンだが、変身後の狼男状態では武人っぽく硬派に。

ユウキ

組織の新人で、重火器・薬品関係&雑用担当。近接格闘も一応たしなむ。

正義のヒーロー

【時空戦隊クロノスファイブ】

レッド

バイザーを常に着用。ケンカ屋でめちゃくちゃ強い。

ブルー

こちらも常時バイザー。武器使いながら素手でもそこそこ。

グリーン

戦隊の常識人。一通りの武術を有段者並にこなす。

イエロー

戦隊内で最年少ながら、暗示術など特殊技能を使う。

ピンク

新体操のリボンを武器に戦う。薬品にも詳しい。

弱々しくも抵抗を続けるキサラ。けれど、その耳元に、レッドがささやきかける。
「見ろよ、愛しのメルちゃんのオマ〇コだぜぇ？　マン毛も薄くて綺麗なもんだ……」
「なにをっ……んっ、ぇ……こ、れ……メル様の……」
もがいていたキサラは、レッドの言葉と自分の目に映る光景に心を奪われたのか、息を飲んでそれをジッと凝視し、知らず動きを止めてしまう。
「ちょっ……ちょっと、なにをっ……キ、キサラちゃんまで、ダメッ……んひっ⁉」
レッドの手の平が太ももの付け根に触れ、ベタベタと撫で回しながら指先で陰毛を掻き分けてくると、非難する言葉が詰まらされる。おぞましい感触にゾクゾクと背筋を震わせていると、指がさらに秘部に近づき、微かに綻んだ割れ目をゆっくりとなぞって陰唇に宛がわれ、そのまま左右に押し開いてきた。
「そのままだぜ？　スカート下ろしやがったら、こいつも同じ目に遭わせるからな」
「――っ……はっ、はい……くっ、うぅ……」
溢れる汗を潤滑油に、クチュゥ……と音を奏でながら陰唇を割り開かれ、外気の感触が秘粘膜を舐めてゆく。武骨な指が肉襞を撫でる、これまで感じたことのない刺激に膝がブルブルと震え、自分でもあまり見たことがない部分を他人に暴かれているという事実が、恥ずかしさをさらに煽ってくる。
（い、いやですっ……レッドさんにブルーさん、それにキサラちゃんにまでっ……）

三人の視線が股間に突き刺さり、肉壺の奥まで抉られているようでたまらない。思わず顔を背けて瞳をギュッと固く閉じると、ヒーローたちが口々に囃し立てる。

「自分では見られないってかぁ？　おいレッド、解説してやったらどうだ？」

「おう！　へへっ、しかしこんだけ綺麗な、手つかずのマ〇コ見るのは久しぶりだぜ。黒ずんだ部分なんかこれっぽっちもねぇ、ちいっと濃い目のピンク色してやがる。ん～、随分と具合よさそうなマ〇コだな、こいつぁ……穴の奥でエロ肉がヒクヒク揺れてんのが、こうやって開いてやると丸見えだぜ。鳥娘も、真剣に見入ってやがる」

自分でもその構造をよく知らない分、レッドの解説を耳にすると無駄に想像力が掻き立てられてしまう。それでも、己の秘部がとてつもなく卑猥なのだということだけは理解でき、泣きたくなるほどの恥辱が込み上げた。

「おいおい、こんなことで恥ずかしがってんなよ。これからその鳥娘には、メルちゃんに熱烈な奉仕をしてもらうんだぜ？」

「は……？　な、なにを言ってるんですっ……それでは、約束がっ……」

キサラを巻き込もうとする言葉に取り乱すメルティーナ、そこへブルーが続ける。

「このままお前を犯しちまったら、上司を目の前で犯される鳥娘も心苦しいだろうからな……身代わりになる最後のチャンスをやろうってわけだ」

「それは……っ、だけど、チャンスって……いったい、どうやって……」

「いまから五分間、鳥娘は舌だけでお前のマ〇コに奉仕する――お前がイケば鳥娘を、イカなかったら、予定通りメル公を犯すってわけだ。ルールは簡単だろ？」
「え……？　えっ、えと……すみません、意味が……？」
なにを言われているかわからず、首を傾げるメルティーナ。けれど、その言葉でキサラはすべてを理解したらしく、少しばかり抵抗はあるようだったが、敬愛する上司を守るためにと返事をする。
「わ……わかった、やるよ……その代わり、約束は守れよ！　いいな！」
「ふぅん……ま、そっちが了承したんなら、俺らも約束は守るぜ」
キサラの反応になにかを感じたのか、ブルーが少しの間をおいて答えた。それで覚悟を決めたのか、鳥人少女は優しくメルティーナに語りかけてくる。
「メル様……心配しないで、アタイが守ってみせるから……少しだけ、我慢してよ……」
「なに……キサラちゃん、なにを……？　ぇ――ひぅぅんっ⁉」
ヌルリ――と、湿った柔らかい感触が太ももの内側に滑った瞬間、思わず上擦った悲鳴が溢れてしまった。それが少女の舌なのだと気づいた瞬間、レッドたちに秘部を暴かれたとき以上の羞恥と、いたたまれなくなるほどに申し訳なさが込み上げてくる。
「いやっ……やめてくださいっ、キサラちゃん！　そんな、汚いです……うぅんっ！　そこは、オシッコすると、こぉ……んぁっ、くっ、ふぅぅん……」

――ヌルゥ……レロッ、レロォォ……ムチュッ、チュパッ……チュゥ……

制止の声が聞こえていないかのように、キサラは唇をメルティーナの股間に吸いつかせて、縦横無尽に舌を躍らせてくる。ピチャピチャと唾液を絡ませ、丁寧に何度も往復させてくるその心地よさに、下半身の力がたちまち抜けてゆく。

（はぅっ、あっ、やぁぁ……なん、ですか、これっ……この、切ない感じ……）

身体の内側が捏ね回され、蕩かされ、けれど飲み込まれるような熱い渦がジワジワと染み広がっていくのを感じる。柔らかい感触が粘膜を舐め擦ると、脱力して緩んだ膣口が呼吸するようにパクパクと開いてしまう。それを待っていたかのように舌先は浅い抽送を繰り返して、淫肉をほぐしながらヌルつく感触を下腹部に刻み込んでくる。

「ひやぁぁ、ふぁっ……キ、キサラ、ちゃ……んぅぅっ、んはぁっ！」

普通に立っていられず脚は内股になり、膝はブルブルと痺れたように痙攣させられる。従順にもスカートは上げたままだが、空いたほうの片手はキサラの頭をギュッと押さえつけ、抵抗するように力を込めているはずが、逆に股間へ押しつける格好になっていた。

「お～、メルちゃん、なかなか大胆じゃねぇか！　もっとして欲しい～ってか？」

「ひがっ、あひゅぅっ！　ひ、違い、ま、すぅっ……ぅんっ、はっ……」

弱々しい否定の声とは裏腹に、熱っぽい吐息はますます激しくなり、手の力を抜くことができない。肉体を包む切ない感触はなんだか怖いのに、もっと味わいたいという心の声

が少しずつ大きくなるのが、自分でもわかってしまう。
「そうは見えねぇぜ？　それとも、この鳥娘がよっぽど手慣れてやがんのか？」
「あむっ、んっ……んちゅっ、じゅるぅ……んじゅっ、じゅぶっ……」
周りの声を遮断し、鳥人少女は目の前の淫靡な花弁にひたすらむしゃぶりついて、貪るような愛撫を続ける。甘酸っぱい牝香に包まれ、口内にいやらしい秘蜜を溢れさせながら、温かい淫肉に舌を包ませて扱くように、何度も陰唇の奥へ挿入を繰り返してくる。
「やはぁっ！　だ、ダメで、すぅ……キ、サラ、ちゃ……ひゃふぅぅっ⁉　なにっ……やっ、そこっ、やぁぁっ！　あひっ、ひぃいっ……」
お風呂場で身体を洗うときにさえ触れない、膣道の深い部分がザラリと舌の腹でねぶられ、背筋を強烈な電流がゾクゾクゥッと奔り抜ける。同時に、包皮に覆われた敏感な肉突起が鼻先で揉み捏ねられ、全身がビクンッと激しく跳ね震えた。
「ひはっ、あっ、はぁ……あうぅぅっ⁉　んやっ、やっ……ふやぁぁっ！」
支えを失った膝は脱力しきって折れ曲がり、鳥人少女の顔を椅子のようにして座り込んでしまう。小柄な自分よりもさらに身体の小さなキサラだが、重さを感じるどころか、より深くまで舌が届くのを歓迎するかのように、鼻先をグッチュグッチュと淫肉に埋め込んで肉芽を嬲り、夢中になって吸いついてくる。
優しいキスを膣に何度も浴び、敏感な柔肉を粘膜で弄られる快感に、頭の中はビカビカ

ッと派手な火花が飛び交っていた。
（なん、でしょっ、うぅ……す、すごいの、がぁ……ひぃんっ、き、来ま、すぅ……）
――チュウ、チュプ……ジュルッ、ジュポッ、ジュブゥ……ヌプ、チュパ……
固く尖って伸ばされた舌に、肉襞を掻き分けられ、膣道をこじ開けられてゆく。
触れたことのない部分を、長い舌でベロベロと舐め上げられ、経験したこともない圧迫感と刺激を送り込まれる。切なすぎる感覚に肉体の芯はトロトロと蕩け、下腹部を突き上げる電流のような波が、頭の奥で爆発してしまう。
「ひゃらっ、ひゃっ、らめっ……ひぃいいっ！　んぁぁっ、いいいぃぃ――っっっ！」
爆発した瞬間、身体中が張り裂けてしまうかのような感覚に、全身がガクガクガクゥッと痙攣させられる。どこもかしこも弛緩（しかん）して脱力しきっているのに、膣奥だけは強烈に収縮して捻（ね）じ込まれた舌を締めつけ、柔らかい唇に向けて股間の奥から溢れる大量の液体を注ぎ込んでしまう。
（あぅぅっ、んぁ、はっ……ご、めん、なさ……お、おもら、ひぃ……ひぃんっ！）
それでもキサラの顔上から離れることはできず、逆に太ももの間でその頭を掻き抱き、切なさを訴えるように思いきり挟み込んで、ひたすら身体を震えさせ続けていた。
どれくらいその時間が続いたのか。ようやく足の力が抜けたところで、チカチカと明滅する視界の奥に目を凝らすと、ベトベトに汚れたキサラの顔が見えた。

「こ、これで……はぁっ、はぁ……メル様には、手をださないんだな……？」
（なに……どういう、こと……なにを、ふぁっ……あんっ、んっ……）
キサラを労ろうとするのに、身体にまったく力が入らない。挑戦的な視線をヒーローたちに向ける少女の目の前でカクンと膝が折れ、崩れた正座のような体勢でグッショリ濡れたお尻を地面につき、立ち上がれなくなる。
「おー、ご苦労さん。しかし四分ちょいでイカせるたぁ……とんだエロ娘だな」
「ま、見てるこっちも楽しめたがな。おい、レッド。あとは任せるぜ」
レッドとブルーが顔を見合わせ、レッドはキサラに手を伸ばし、ブルーはメルティーナの元へ近づいてくる。
「お疲れだったなぁ、メル公……ま、これで犯されずに済むぜ。よかったなぁ？」
「な……にを、んっ、くぅ……い、って、るん、で……ぅ……」
「さっきも言ったろ？　お前がイッちまったから、あの鳥娘を犯すんだよ」
見ろ、とブルーがあごでしゃくって見せた先では、レッドがキサラを四つん這いに押し倒し、ショートパンツを太ももあたりまで引きずり下ろしていた。
「っっ……や、め……て、あげてっ……私が、代わると……言ったじゃ……」
「それをさらに代わるって、アイツが決めたんだよ。おら、黙って見てろ」
目の前では唇をキュッと引き締め、瞳を閉じたキサラが微かに震え、レッドの手が尻房

を這い回るのに黙って耐えている。飾り気のないショーツの上から秘部を捏ね回され、小さく身体を跳ねさせながら声も上げないその姿は、あまりにも健気なものだった。
「やる、なら……はやく、しろよ……っ」
「焦らなくても、ちゃんと犯してやんよ……おぉ～、びしょ濡れじゃねぇか。メルちゃんのマン汁飲んで感じちまうとか、とんだエロ娘だな、えぇ？」
レッドの手の平に包み込まれた股間部が、濡れた布でも絞っているかのようなグチュグチュという水音を響かせ、蜜液を地面に滴らせる。自身の反応とヒーローの言葉で頬を真っ赤にしたキサラは、視線を鋭くして背後を睨んだ。
「そ……そんな、わけ……あるかよっ、アタイは……そんな――ひぅっ⁉」
ぐしょぐしょになったショーツを脱がすこともなく、隙間から突っ込まれた武骨な指が陰唇をこじ開けて、敏感な粘膜を捏ね回す。
「ひゃらっ、ひゃっ……そこっ、やめっ……んぅぅぅっっ！」
途端にビクビクビクンッと全身を大きく震えさせ、キサラの淫声が響き渡る。
「へへっ、ほれ見ろ。クリ弄っただけで即イキとか、どんだけ感じやすいエロ女だよ。しかもこのデカさ……毎日オナってねぇと、こうは育たねぇだろ」
「はひゅっ、はっ……ひ、ひれ、らいぃ……あぃっ、ひぃぃんっ！」
力なく上げた顔は涙と涎で汚れ、瞳をトロンと蕩けさせて頬は桃色に染まっている。艶

のあるその表情を目にし、メルティーナは思わずそれを、可愛いと感じてしまった。
（キサラ、ちゃん……もしかして、私もさっき……あんな、顔を……っ）
込み上げる羞恥に、全身がカァァッと熱くなる。その耳元でブルーがささやく。
「おいメル公。あの鳥娘はな、毎日のように自分でああいうことして、さっきのお前みたいにイキまくってんだとよ。ＭＢってのは、そういうエロ集団なのか？」
「そんなっ、違います……っ、キ、キサラちゃんだって、そんなこと……するわけ……」
違いますよね、とすがるような視線を向けると、泣きそうな顔をした鳥人少女は顔を真紅に染め上げ、己を恥じ入るように顔を背けた。それで悟ってしまう、おそらくブルーたちの指摘は、事実を示していたのだと。
「あっ……ご、ごめんなさいっ、キサラちゃん……いいんです、それは……お、おそらく、普通のことなんでしょうから……き、気にしないで……ね？」
慌ててフォローするその言葉にも、キサラは顔を上げることはできなかった。そんな二人のやり取りを見て、ヒーローたちがゲラゲラと笑いを上げる。
「くっははははっ、そりゃひでぇだろ！　えぇ、メル公よぉっ！」
「おーおー、オナニー常習バレちまうたぁ、可哀想になぁ？　へへっ、それじゃあ俺の自慢のクロノスソードで、慰めてやるとすっか」
言いながら、ズボンのファスナーを下ろしたレッドが、股間から醜悪なまでに巨大な肉

幹を取りだし、キサラの股間に突きつけた。
（――っっっ⁉　あ、あああ、あ、れ……なな、なんなん、ですか……）
遠目にもわかるほどに幾筋も血管が浮き上がり、ドス黒く変色した肉塊がそそり立つレッドの股間に、思わず視線が釘付けになってしまう。そのおぞましい凶器のような形状に気分が悪くなるが、それがキサラに向けられていることで瞳を丸く見開く。
（なに、するつもりです……あ、あんなのを、まさかっ……）
おぼろげにイメージできる程度の知識しかないが、それが性交なのだと理解した。
「レ、レッドさんっ！　やめて、くだ――」
――ヌリュリュリュッ、ズチュゥゥッ！　グチュッ、ズブゥッ！
「あくぁぁっ！　ぐっ、うぅぅ――っっ！」
痛みに耐えるような苦悶の声を噛み殺し、キサラの全身が強張るのを目の当たりにし、背筋が凍りつく。一瞬だけこちらに向けられた視線に、心を貫かれるようだった。
（キ……キサ、ラ……ちゃ……わた、し……私の、せい……で……あっ、あぁぁ……）
その視線からは、なにも心配はいらないと――メル様はなにも気にしないで、と訴える彼女の心の声が感じられた。途切れ途切れに聞こえるか細い呻きに混じって、結合部からもれるグチョ、ヌチュ……という水音が、頭の奥まで響いてくる。
「ぅ、あ……ど、どう、すれば……っ⁉」

ショックのあまり動くこともできないメルティーナの肩を、ブルーが叩く。
「しっかり見とけよ？　レッドの野郎が終わったら、次は俺の番だ。あの鳥娘が孕(はら)むぐらいヤリまくってやるからな……へへっ、楽しみにしてろ」
「っっっ……だ、ダメっ……いけません、どうか……お願いします……」
懇願するようにブルーを見上げると、その青いマスクの下で、彼の唇が歪む。
「そうだな……ならよ、てめぇが俺のモノを満足させるってのはどうだ？」
「ぇ――だ、だけど、それでは……」
彼女がなんのために身体を張ってくれているか、それがわからないほど愚かではない。
ここでブルーの要求に答えては、キサラの行為がムダになってしまうだけでは――そんな考えを読んだように、ブルーが続ける。
「あぁ、別にヤラせろってわけじゃねぇ、フェラで十分だ。口で満足させてくれりゃ、お前を犯さねぇ約束も守れるし、鳥娘の負担も減るんじゃねぇか？」
「へら？　えぇと……く、口で……です、か……？　ひっ……あ、うぅ……」
ブルーがズボンから剛直を引きずり出して、メルティーナの手に無理やり握らせる。燃えるような熱い感覚と、ドクドクと脈打つ不気味な感触に思わず手を引きそうになったが、すんでのところでそれを思いとどまる。
（っ……やらないと、キサラちゃんが……やれば、キサラちゃんが……）

異性の排泄器官に手を触れている汚辱感に、全身が拒絶反応を示す。それを口にしなければならないと考えると、さらに嫌悪感が増す。けれど、選択肢は一つしかない。
「……わかり、ました……けどっ、わ……私には、経験がありません……ので……」
「へへっ、そうこなくちゃなぁ。いいぜ、教えてやるよ……おらっ！」
大柄な男に手を掴まれて引っ張られると、まるで抵抗はできなかった。たたらを踏んで地面に膝をつき、低くなった顔に、ブルーの腰が思いきり押しつけられる。
「きゃっ……うぅっ、やっ、あぅ……うぅうんっ……」
レッドの肉塊とほぼ同じ大きさの、色黒でおぞましい肉槍が頬をグリグリと押し込んでくる。漂ってくる青臭い臭気が、肌から顔の奥へ染み込んでくるような感覚に晒され、ゾワゾワと背筋が粟立ってゆくのを感じる。
「おぉ、なかなかいい感触じゃねぇか。抵抗すんな？　口ん中で唾液溜めてろ」
言われるままに口内を唾液で満たすと、突きだされた唇を牡槍の先端が撫でてくる。
「まずはそのまま、ここにキスしてみろ。舌で舐め回しながら唾でベトベトにして……全体的に濡らしたら、そのまま飲み込むんだ……口の唾液は残したままでな」
「んっ、ふぁ……ふぁい、んぇ……ちゅぶっ、ちゅっ……れろぉ……」
舌先を伸ばし、大きく膨らんだ部分に触れると、焼けるような熱さが伝わってくる。鼻先と口を這い上がる生臭さに吐き気を催しながら、それでもキサラの負担を減らすべく、

唇から唾液を流して肉幹を濡らして丁寧に舐めてゆく。
「んぐっ、んぅぅ……れりゅっ、えぉぉ……ちゅっ、んふっ、んちゅぅ……」
「おぉっ、なかなかうまいじゃねぇか……その筋のとこだ、もっと重点的に舐めろ」
「ひぅっ、は、いぃ……んぇおぉぉ……あふっ、あむっ、れる……」
一度舐めてしまえば、もはや抵抗する気も起きなかった。桃色の美しい粘膜を披露するように舌を大きく伸ばし、腹の部分で肉幹をゆっくり舐め上げ、先端で筋の集まった箇所をチロチロと突くように擦ってゆく。ヒクつく先端に何度も口づけ、唇は少しずつ開いて唾液を注ぎ浴びせながら、肉の塊を口内に沈める。
「んっ、んんぅぅ……じゅるっ、ぢゅぶるぅぅ……ぐぷっ、んぅっ……」
ジンと頭の頂点が痺れ、肺奥に流れ込んでくるおぞましい臭気に、意識が朦朧（もうろう）としてしまう。アイスキャンディーにそうするように膨らみの先端をしゃぶり、唾液の海で転がしながら、ねっとりと舌でねぶってゆく。
（はぁっ、あぅぅぅ……に、苦くて、熱くて……うぐぅぅっ、気持ち、悪い……）
熱い感触に舌を焦がされ、口内を汚辱にまみれさせながら、胸の奥がギュッと切なく締めつけられる。愛しい相手とのキスさえまだなのに、唇を汚された――その思いは鋭い痛みとなって、ザックリと深く突き刺さる。
「よし、そのままもっと深く飲み込め……おら、手も使って扱け、上下にしっかりな」

第三話　悪魔の誘惑、甘い罠　その１

「は～い、お兄さんが陽子の一夜奴隷になったっていう、証拠だよ～。あははっ、よく似合ってるね～、変態のマゾ狼さんには、ピッタリの首輪かも～」
「っ……ふざけんなっ、こんな拘束くらいでオレを……くっ!?」
「きゃははは！　ムリムリィ～、その手錠はクロノス合金製だからね～。ヒーローの武器にも使われる金属だしぃ、人型のお兄さんじゃ、ヒビ一つ入れられないよ～？」
ガチャガチャと虚しく音を響かせる抵抗を嘲笑いながら、少女の手が股間を這い回る。
「むにゅっ、むにゅぅ～♪　あははっ、タマタマ揉まれるの、いいんだ～？　スッゴい反応だよ、もう固くなってきてるぅ……自分の精液擦り込まれて、気持ちいいの～？」
睾丸を手や口で愛撫させたことも少なくはない。だが視界が閉ざされたシチュエーションで受けるその感覚は、快感を何倍にも増幅させて、肉棒にドクドクと送り込んでくる。はち切れんばかりに膨らんだペニスを撫でられ、乳首を啄(ついば)まれながら言葉責めされるだけで、すぐに二発目を暴発させてしまいそうになる。
（くっ……そぉ、ファイブが相手だってんなら、無様晒してられねーだろ……ってか、さすがに、こんなのでイッちまったら……くぁっ！）
乳首を甘噛みされて、思わず全身が跳ねた。その反応にクスッと笑いを響かせ、少女は身体の向きを変えると、ショーツで包まれた股間をロギスの胸元に擦りつけてくる。
「ほぉら、気持ちいいでしょ～？　陽子のオマ〇コ、もう濡れちゃってるからぁ……こう

やってあげるとぉ、あぁんっ……んふふっ、お兄さんに陽子の匂い、マーキングできちゃうかも～……んっ、ふぅ……ね、ほら～、こっちにも擦りつけちゃう！」
「ふぉぉっ、んむっ……んっ、んぐっ、んんぅぅぅ～～～っっ！」
――ドビュドビュッ、ビュククンッ！　ビクッ、ビクビクゥッ！
汗と牝蜜の入り混じった甘酸っぱい香りが鼻腔を満たし、顔中を包み込んで肺奥へ染み広がった瞬間、心の抵抗が砕き割られたかのようにペニスが弾けた。細胞の一つ一つが痛烈な快感に突き刺され、下半身がガクガクと震えさせられる。
「わぁっ……も～、これからお兄さんに、陽子の匂いをたっぷり染み込ませて覚えさせて、ゆっくりシコシコしてあげようと思ったのにぃ……我慢もできないで二発目射精しちゃうなんて、どうしようもない早漏チンポだね～？」
（うくっ、おぉぉ……あ、りえねー、な……で、こんな、早く……うぅぅっ！）
タパタパとお腹に降りかかる自らの精液の感触に恥じ入り、少女の匂いに包まれ迎えた射精の余韻に身を震わせる。そしてその甘い牝臭が劣情を刺激し、精を放っても肉棒は萎えることなく、なおもはしたなく躍動し、牡欲を少女に訴えかける。
「あはっ、まだこんなに元気だなんて、節操なしのダメチンポ～♥　いいよぉ、いっくらでも射精させたげるからねぇ……お兄さんのキンタマ、空っぽになるまで搾り取ってぇ……奴隷になりますから許してください～、って泣かせてあげちゃうね～」

「はっ……バカ、言ってんじゃ……ぬぉぉっ!?」
トローリと肉棒に塗された、生温かくヌルついた感触に声を上げてしまう。
「えぉ、んべぇぇ……えへへ～、おチンポどうなってるか、わかるかな～？　陽子のツバとお兄さんのマゾ精液で、グッチョグチョのドロドロにしてあげたんだよ～」
「や、めぇ……あぐぅぅっ、ふはっ、はぁぁっ……」
陽子の両手が男女の体液を馴染ませながら、まるで別の生き物のようにペニスに絡みついて、肉幹全体と睾丸とを撫で回してゆく。その潤滑油は強烈なハンドタッチを絶妙の力加減へとすり替えて、蕩けるような甘い快感を注ぎ込んでくる。睾丸を掬い上げるようにして優しく揉みほぐされ、テラテラと濡れ光るペニスを根元から裏筋まで、じっくり焦らすように扱かれると、無意識のうちに腰が跳ねてしまった。
「んふふっ、お兄さんのチンポ、早漏だけどおっきいよね～？　指二本でリング作ってあげても、収まりきらないんだもん……せっかくだし、早漏治してあげよっか～？　ほら、キュッキュッ、キュッキュッ……イキそうになったら、止めてあげるね～」
睾丸マッサージを受けながらの指コキは、それだけで精巣から白濁液を吸い上げられるようだった。愛撫こそおとなしいものの、連続絶頂のせいで敏感に研ぎ澄まされた性感神経は、三回ほど往復されるだけで射精を促され、肉幹を大きく膨れさせてしまう。
「あはっ、ダメダメ～♪　まだまだ我慢だよ、早漏さ～ん……ほら、シュッシュッ、シコ

ッシコッ♥　ふふっ、先っぽから透明なお汁が滲んでる～。よしよし、泣いちゃダメでちゅよ～？　もう少しの我慢でちゅからね～？　ほら、シュッシュッ……」

「黙れっ……あぐっ、うぅうっ、ふぁぁっ！　な、舐めんな……んぐっ、くぅぅ……」

赤ちゃん言葉で屈辱を煽られるのに、少女の指先一つで簡単に喘がされてしまう状況が、狂おしいほどに快感を引きだしてくる。けれどそれが最高潮を迎える前に指の動きは止まり、モヤモヤとした肉悦の澱(おり)が身体の芯に食い込んで、次第に絶頂感を覚えるまでの時間が短くなる。いまや陽子の指が一往復するだけで、ロギスは容易く腰を浮かせてしまい、絶頂をねだるように肉棒をヒクヒクと痙攣させてしまっていた。

「は～い、ダメ～。む～、全然我慢できてないよ、お兄さん？　可哀想だから、そろそろ三回目のおチンポミルク、ピュッピュさせてあげたいんだけどぉ……そうだ！　あと五往復だけ我慢できたらぁ……さっきの勝負、お兄さんの勝ちにしてあげるね～」

（んだとっ……こんの、ガキッ……舐めやがって……っ）

イキそうになっているとはいえ、すでに二回の精放出をしたペニスは、もう少しくらいなら長持ちする。もしも陽子が約束を守るのであれば、五往復を終えたあとで泣きを見るのは間違いなく、勝ち誇ったように笑い声を響かせる少女のほうだ。

（見てろっ……こっちだってヒーロー相手に、そう何度も負けてられねーんだ……大人をバカにしやがった償い、そのロリ体型に刻んでやるぜっ……）

脳内に広がるのは、肢体をいまの自分のように拘束され、ロギスの自慢の肉棒で何度も絶頂を迎えさせられる陽子の姿だった。その妄想にゴクリと生唾を飲み、けれどその気持ちを押し隠しながら答える。

「へっ……や、って、みろや……この、ヘタクソが……ぁぅっ」

「は～い！　い～ち……んふふ、早漏おチンポ、ガンバレ、ガンバレ～」

ニュルルッと根元まで下がった指先が、浮き上がった血管の感触を楽しむように亀頭まで這い上がってくる。思わず緩みそうになった筋肉に力を込め、射精欲求をこらえる。

「に～い……えへへっ、よく一回目は我慢できたね～、エラいでちゅよ～」

腰を持ち上げた陽子の股間が、再び顔の上に押しつけられる。ショーツの奥から染みだした愛液に顔が汚れ、先ほど溺れかけた彼女の匂いで頭の中を支配されたようにボンヤリとさせられながら、跳ね上がる腰を抑えようとロギスは両手を握りしめる。

「さ～ん……あはっ、お口がパクパクしちゃってるよ～？　射精したいのかな～」

至近距離で凝視されているのか、フッと吐きこぼれた熱い吐息が亀頭に絡みつき、ゾクゾクッと背中が震える。いま射精すれば、陽子の顔を汚せる――そんな欲望を懸命に押し殺して、膝をバタつかせながらも大きな波を乗り越える。

「よ～ん……んふふっ、次でラストだもんね～。よ～く揉んで、たっぷり出るようにしてあげるぅ……もにゅ、もにゅ、むにゅぅぅ……えへへ、熱くって重いね～」

睾丸を念入りに揉みしだかれ、我慢のネジが弾け切れてしまいそうだった。あと一回、あと一回耐えきれば、陽子を存分に犯し啼かせることができるのだ。

（はぁっ、はぐぅぅぅっ……ま、待ってろ、よ……）

全身はプルプルと小刻みに震えており、その反応に陽子がまたも失笑をもらした。

「それじゃ～、残念だけどイッちゃおっかぁ……ご～お……うふふ、えいっ♥」

――ヌルルゥゥゥ……ニュルンッ、ニュムゥ……チュプゥゥッ！

混ざり合う淫液を潤滑油に指が肉棒に食い込んで、根元から絡みつくように扱き上げてくる。尿道は直接扱かれているような感覚を受けて完全に緩みきり、激しい放出感がペニスの先端から精巣の奥へ逆り、直腸まで突き抜けてゆく。

（うっっ、くぉっ、おぉぉぉぉっ……た、耐える、こんくれぇなら……っつぁぁっ!?）

そうして歯を食いしばった瞬間、快感の出口を押し開くように、細い指先がヒクつく尿道口へグリグリと捻じ込まれてしまった。その瞬間――。

「んぐぅぉぉぉっっ!?　おふっ、おっ、おぉぉぉ――っっ！」

――ドビュビュルルルゥゥッ！　ビュクビュクビクッ、ビクンッ、ドビュルッ！

「きゃっははははは～、出た出たぁっ♥　た～っぷり、濃ゆいの出ちゃってる～」

寸止めを味わわされた反動が一気に押し寄せ、どこにそれだけ詰まっていたのかというほど大量の精が、下腹部の奥から溢れだす。陽子の手によって天を衝くように固定された

直立の肉棒は、その手の中でビクンビクンッと暴れ回り、幾度にも渡って白濁を撒き散らし、ベッドのシーツからロギス自身の身体にまで、青臭い汚れを広げてゆく。
（うぁっ、あっ、あぁぁぁぁっ……ぐぅっ、ま、た……イカされて……っ）
虚勢が剥がされ、残されたのは渦巻く羞恥だけ。男根が何度も脈打ち、そのたびに快感が逆って頭の中が灼けついていくようだった。
「あ～あ、我慢できなかったね～。だけど気持ちよかったでしょ～？」
「やっ、め……うくっ、うぅ、さ、触んなっ……あぅぅっ」
根元に残る精液を搾り取るように、陽子の小さな手が牡槍を握り、コシュコシュと激しく扱き立てる。くすぐったさと痛みを感じるほど敏感な性器を弄られ、身を捩りながら声を上げるロギスの姿に少女はクスクスと笑い、青年の身体に降り注いだ精液を手の平で押し広げ、語りかけてくる。
「んふふ、きったないセーシでドロドロだよ～？　見えなくって残念だね～、自分のお腹にブッカケしちゃってるトコぉ……ほら、こぉんなに～」
手の平を押しつけたり離したりするだけで、グチュ、ニチュゥ……と音が響き、白濁の粘糸が引き伸ばされているのが見なくてもわかる。そんな屈辱的な姿を笑われているというのに、背筋を震わせる興奮に刺激され、股間がまたもムクムクと隆起してしまう。
「よ～しよし、元気だね～♪　じゃあ次はぁ……こぉんなの、どうかな～？」

「おぐっ！　んんぅっ、んぐっ……ふぅぅっ！」
ズシッと勢いをつけた少女の桃尻がのしかかり、ロギスの顔を椅子のようにして座り込んでくる。濃厚な甘酸っぱい香りと味にたちまち唇と鼻を犯され、息苦しさも手伝って青年は思わず深呼吸をしてしまう。
「やんっ♥　も～、そんなに思いっきりエッチな匂い吸っちゃって、ヘンタイなんだから～。いいよぉ……身体の中まで陽子の匂いでいっぱいにして、イッちゃってね～」
それまでのように膝で青年の身体を挟んでいた体勢をやめ、陽子は完全にロギスの上に座って脚を伸ばすと、ソックスに包まれた足を股間に宛がい、肉棒を捏ね回してくる。華奢で小柄な少女だけあって、重さなどほとんど感じることはなく、その匂いと脚の感触がもたらす蕩けるような快感に飲まれ、腰が激しく跳ねる。
「お手々だとすぐイッちゃうから、手加減してあげてるんだよ～？　ちょっとは長引かせて、陽子も愉しませてくれないかな～？　ほぉら、うりうりっ、うりぃ～♪」
陽子の足技はそこらの女の口技や膣などよりも圧倒的に気持ちがよかった。片足でペニスを踏みにじりながらお腹に押しつけ、圧迫しながら上下に擦り捏ねてくると、無意識に腰がクイクイと持ち上がってゆく。触れられるだけでも痺れるほどの快感を覚えてしまう敏感な肉棒が、完全に勃起してそそり立ってしまうと、待ってましたとばかりに両足に挟まれ、まるで二本の手でそうされているかのように、ゴシゴシと激しく扱き上げられる。

ただ、それだけで――。

「ん～、もうイクのかな～？　さっきから足の間でおチンポ暴れ回って、破裂しちゃいそうなんだけどぉ……あっ！」

――ビュクビュクッ、ドクッ、ドクドクッ……ドビュルッ！

三十分ほどの短い時間で三回の射精に導かれたロギスは、その三度目の直前に限界までの我慢を強いられたこともあり、体力が底をつきかけていた。もはや抵抗する気力もなく、力なく身体を痙攣させて精を吐きもらすと、荒い息をついて肉棒を萎えさせる。

「あははっ、イッてるイッてるぅ……ほぉら、もっと元気だして～」

顔からお尻を上げた陽子が、今度は広げられた両脚の間に入り込み、両手を太ももにそっと添えて顔を股間に近づけてくる気配を感じる。

「う～わ～、生臭～い……べろっ、べろぉぉぉ……ぶちゅっ、んっ、ふぅぅぅ……」

熱く蕩けた肉の穴に、肉棒を吸い込まれたように思えた。けれどぴちゃぴちゃと音を立てて舌に舐め上げられると、それが唇だったということに気づく。陽子の小さな口内の奥深くまで肉棒を飲み込まれ、舌でくまなく舐め回されるだけで、肉体の芯までが快感に侵されてゆく。さらに――。

「あぐぅぅっ⁉　うぉっ、ほぁっ……いいいいっ⁉」

睾丸をコリコリと揉みほぐしていた指先が、纏わりついていた精液を潤滑油に肛門へ捻

じ込まれる。先端に保護用のゴムを付けているのか、ヌルつく滑らかな感触は簡単に直腸を割り開き、折り曲げられた指先がお腹の裏側を擦るように刺激を送り込んでくる。
「コ・コ、いいでしょ～？　男のコが元気になるツボだよ～、は～い、復活～♪」
「あぎっ、あっ……くぁぁあっっっ！」
　陽子の言葉に導かれるかのように、萎えていた肉棒は瞬く間に血脈を激しく躍動させ、またしても固く屹立してしまう。もはや言葉にもならない悲鳴を響かせ、前立腺の刺激にのたうち回る青年の姿に、少女は嗜虐的に笑いながら耳元に口を寄せた。
「あっははは っ！　お尻弄られて勃起しちゃうなんて、ヘンタイさんだよね～？　早漏で、マゾで、アナル好きだなんてぇ……イケメンでも、こうなっちゃうとオシマイかな～って思うよ？　あはっ、こんな風に言われても感じちゃうんだ～、マゾ狼さ～ん？」
「あぐっ、あっ、はぁぁぁっ！　あむっ、んっ……んんっぅぅぅっ！」
　アナルに捻じ込まれた指をドリルのように回転されて、直腸を穿られると、背中がビクンビクンと跳ねて快感に悶えてしまう。そのまま、屹立した肉棒をショーツ越しの秘部でニチャニチャと擦り立てられ、勃起した乳首を抓られ、挙句には自らの精液と少女の唾液を口移しで注ぎ込まれる。屈辱的な性拷問を受けさせられているのに、身体中で肉悦が弾ける圧倒的な感覚に、脳内は意識を手放して快楽に流されてゆく。
　――ドクッ、ドクッドクッドクッ！　ビュクビュクッ、ビクンッ！

「んふっ、んむっ、んんんぅぅ〜〜っ……ぷぁっ、はぁ……えへへ、ごかいめ〜♥　スゴいよねぇ、一時間も経ってないのに五回もイッちゃうなんて……こんな早漏さん、陽子も初めてかも〜、きゃははっ！　ね〜、自分のセーシ飲んでイカされるのって、恥ずかしくないの〜？　しかもこんなにいっぱぁい……ふふっ、まだまだ搾っちゃうよ〜」

前立腺が絶え間なく刺激され、耳をしゃぶられ、唇をねぶられ。そうかと思えば乳首を噛まれて、精液で汚れた指で口内を掻き回され――。

（ふぁっ、はっ、あぁぁ……くっ、イ……また、イクッ……うぅぅっ）

――ドビュルッ、ビクビクンッ、ビュククッ！

緩んだ蛇口のようにこらえのない肉幹は、膨大な快感に促されて射精を余儀なくされてしまう。淫熱に快楽中枢が灼き切られ、もう思考さえもできなくなっているようだった。

「わかってるの、お兄さ〜ん？　陽子はぁ、まだ下のお口も使ってないんだよ〜？　それなのに、だらしないおチンポはマゾミルク、ドピュドピュ〜って垂れ流してぇ……どうしようもないよね〜、ふふっ。言っておくけどぉ、お兄さんみたいな早漏さん、周りには一人もいないよ〜？　ホント、『射精するたびに、どんどん早漏になってる』みたい〜」

耳から滑り込む少女の声が、頭の中に染み広がってゆく。その言葉に誘われるまま、ロギスは陽子の指先が亀頭をパチンと弾いた瞬間、またも肉棒を跳ねさせた。

――ドクッ、ビュルビュルッ、ピュッ……

第三話　悪魔の誘惑、甘い罠　その２

「座りましたけど……」
『おー、ご苦労さん。そんじゃ次は、そこでオナニーしろ』
「はい……って、あの……」
なにを言われたのかよくわからず、問い返す。
「オナニーってなんですか？」
――ザワザワザワッ！
「――へっ？　あ、あれ……なんでしょう、ブルーさん……いきなり、店内が……」
自分の発言の直後、急に店の中の客がざわつきだし、遠巻きに大勢から見られている気配を感じる。しかしそちらに視線を向けて目が合うと、なんとも微妙な表情で顔を背けられてしまう。
『おまっ……そんな大声で言うバカがいるか！　前にも言ったろ……オナニーってのは、てめぇんとこの鳥娘がやってるみてぇに、自分で自分を気持ちよくすることだ！』
「え……自分でって、え……あ――」
そこまで聞いて、ようやくその言葉の意味に気づき、そしてフラッシュバックする教会での痴態を思いだし、顔がボッと発火したように赤く染まりきる。
「そっ……そそそそそ、そんなここここっ、ことっ、できるわけが――っっ⁉　ち、違います、違いますよ、皆さんっ……いまのは、私じゃ……っ」

電話越しに会話していたのだが、イヤホンマイクに気づかない他の客たちはいきなりの美少女の問いに、興味津々といった感じで注意を傾けている。知らなかったとはいえとんでもない発言をしてしまったことに恥じ入り、メルティーナが顔を伏せていると――。

「へぇ、ネェちゃん、オナニーしてぇのか？　なら、手伝ってやろうじゃねぇか」

ニヤけた二人組の若い男が、別の席から立ち上がって近づいてくる。驚いて拒否しようと口を開いたところで、男たちの声が聞こえたのか、ブルーが笑いを響かせた

『へへへっ、面白くなってきたぜ。いいじゃねぇか、そいつらに手伝ってもらって、そこでオナってみろ。拒否したらどうなるか、わかってんだろうな？』

「――っっっ⁉　お、おかしなことを……って、まさか本気ですか……？」

その問いに答えはなく、代わって近づいてきた男たちが答えるように腕を掴む。

「あぁ、本気に決まってるじゃねぇか。じっくり教えてやるぜ」

「やっ、やめてっ、放してください……きゃっ」

言葉では拒絶しつつも、ブルーの命令が耳にこびりついて抵抗ができなくなる。そんなメルティーナの態度に、周囲の興味に満ちた視線は少しずつ好奇の色を孕み、女性の客からは侮蔑に満ちた冷たい視線がぶつけられていた。

「お客さんも期待してるしよ、たっぷりサービスしてやろうぜ」

「そんなっ……んっ、くっ、うぅぅ……」

男に掴まれ、無理やり動かされた手がノーブラの胸を押し込んでたわませ、もう片方の手はスカートの中で太ももを撫で回す。じっとりと汗ばんだ肌が自分の意志とは反対に自分の手で触られるという異常な状況、その羞恥と屈辱で顔に赤味が差す。

「うっわ……こんなトコで昼間っから……頭おかしいんじゃないのっ？」

「まぁ俺らは罪にならねーし、見ててもいいんだよな？」

（か、勝手なことを言わないでください――っっ！）

周囲の揶揄の声にカァッと頬を熱くしつつも、男たちの手による自慰は続けられる。

「んん～？　ずいぶん胸が柔らけぇな……もしかして、ノーブラかぁ？」

「ぎゃははっ、そりゃねーだろ！　どれ、俺らも手伝ってやるか」

そう言いながら、男たちはメルティーナの腕を拘束したまま、肌に手を触れさせる。

「なっ……や、やめてください、だめですっ……んんぅうっ！」

ゴツゴツとした大きな手が、無遠慮にも腋下から滑り込んでお腹を撫で上げ、突きだされた形よい美乳を包み込んでくる。ミニスカートから伸びる脚もベタベタと撫で回され、気が遠くなるほどの羞恥と怒りに、思わず身震いさせられる。

「うへへへ！　綺麗な肌してんなぁ！」

「おい……マジでこいつ、ブラしてやがらねぇ！」

（なっ――）

公の場で下着の未着用を指摘され、顔が凍りつく。周囲の男性からはますます好色な視線が注がれ、それだけで恥獄の檻に叩き込まれるような気持ちだった。

「うわ、やっぱ本物の痴女かよ……」

「最ッ低ー、女がみんなあんな風だって思われちゃうじゃない！」

（ちっ――違いますっっ！　私はそんなっ……はしたない女じゃありませんっ！）

容赦なく投げかけられる、蔑みや罵倒の言葉が耳に突き刺さり、消え入りたくなるほどの羞恥を覚える。両手さえ自由ならばいますぐ店から逃げだしてしまいたかった。けれどそれさえも許されず、男や自分の手で胸をいいように弄られ、柔らかい太ももを擦られると、どうしようもなく声が上がってしまう。

「あふっ……んっ、くっ、ふぅぅぅん……やっ、やめて、ください……んぅぅっ！」

男たちの手からもたらされる嫌悪感に背筋がゾッと総毛立つのに、慣れ親しんだ自分の手で触れさせられると、その安心感に肉体の奥がキュンッと痺れてくる。グニグニと形を変える乳房からは甘い波が染みだし、少しずつそれを身体に刻み込まれているようだった。

「おほ～、可愛い声だねぇっ……もしかして、下も穿いてねぇのかな～っと」

（っっ……いけませんっ、それだけは……き、気づかないでくださいっ……）

たまらず脚に力を込めて、膝を閉ざすようにして身体を強張らせるが、男たちの腕力の前にはそれも役には立たない。

「そんな抵抗するフリまでして、可愛いね～。おらっ、ご開帳～」
「ひっ……やぁぁぁぁっっ！」
甲高い悲鳴を上げて真っ赤に染まった顔を背けるが、男の手で開かれた下半身は、街路に面したガラス壁の向こうに、隠されるべき秘部を晒してしまう。
（い……いやっ、あぁぁ……ひっ、あ……み、見られ、ちゃいますっ……）
ガニ股のように開脚させられ、タイトなミニスカートは太ももの付け根までめくれる格好になり、剥きだしになった秘唇に空気が触れる。カタカタと震える膝を開く手は、股間の付近を撫でるくらいスカートの奥に滑り込み、自分の指先にザラリと陰毛の感触が触れる。その瞬間、事実に気づいた男が、耳元にささやきかけてきた。
「ここで、大声で叫んでやろうか？　この女はノーパンだってなぁ？」
「やっ……こ、困ります、それだけは……これは、私の意思じゃないんですっ……」
涙声になって訴えると、男たちはニヤニヤと笑ってさらに続ける。
「だったら、自分の意思でやって見せてくれよ。思いっきり股開いて外の連中に見せつけながら、自分で胸揉んで……ねちっこいオナニーしろよ、えぇ？」
――選択の余地はなかった。屈辱に唇を噛んで感情を押し殺し、瞳を閉じてコクンと微かに頷いたメルティーナの身体から、男たちの手が離れる。
（そんなっ……だけど、やるしか……ないんですよね……）

悔しさから唇を噛み、けれど覚悟を決め――思いきり脚を開かせ、胸に手を這わせる。
「んっ……ふぁっ、はっ、うぅぅん……んっ、んぅっ！」
手の平でクニクニと肉丘を捏ね回すと、徐々に固さを帯び始めた乳頭が擦れ、鼻にかかった甘い吐息がこぼれてしまう。僅かに上向かせ、興奮と火照りで上気した顔がどのような表情を作っているのかが気になり、メルティーナは瞳を少しだけ開いてみる。
（――っっっ⁉　あ、う……うそ、私……こんな……）
目の前に映るのは、唇で弧を描き、眉が悩ましくひそめられて、瞳が潤んでいる自分の表情。そこから感じるのは艶のある、女性特有のいやらしい雰囲気だった。
「ひゅうっ、エロい顔しやがって！　ほれほれ、さっさと続けてくれよ！」
ウィンドウから顔を背け、男の指示に促されて仕方なく手を動かす。
「んっ、ふっ、やぁ……あぅっ、うぅん……んはっ、はぁぁ……」
ノーブラの乳房が手の平の中で潰れ、敏感な部分から刺激が染み込んでくる。意識していないのに唇からは荒い息が溢れ、腰が艶めかしくくねり、身体の淫熱がどんどん膨らんでしまうのが感じられた。
『おーおー、いい光景じゃねぇか。わかってんのかぁ？　ノーパンの股開いてオナニーしてっとこ、外から丸見えになってんだぜ？　へへっ、たまんねぇな……いい画が撮れそうだ、なぁレッド？』

（――っっ、そ、そんなっ……うぅっ、や、やっぱり、これ以上……なんて……っ）
耳元からささやかれるブルーの煽りに、ビクンッと全身が震える。込み上げる羞恥に、たまらず胸元から手を退けて、開かれた脚を閉じようと力を込めた――けれど。
「おぉっと！　ダメだぜ、おネエちゃん……へへ、恥ずかしくて続けらんねぇか？」
「だったら俺らで手伝ってやるよ……ほれ、ギャラリーも増えたしな」
左右から伸びる何本もの男の手が、股間を開かせるようにメルティーナの手を太ももに押さえつけ、乳房を揉みしだき、太ももを無遠慮にベタベタと撫でて、窓外に向けられた剥きだしの淫裂をなぞり上げてくる。
「ひゃうぅぅっっ⁉　やっ、やだ、なにするんですかっ……って、え……なっっ⁉」
思わずキッと視線を鋭くして周囲を睨み、動きが硬直させられる。
（ど、どうして……いつの間に、こんなっ……うぁっ、あぁ……い、イヤですっ……）
二人だけだと思っていた男たちは、いつの間にかさらに増えており、その誰もがニヤニヤとこちらを眺め、しかもその手で身体に触れてきている。
「う、うそっ、やめてっ……あひゅっ、ひっ、やぁぁ……あんっ、んんぅぅっ！」
抵抗するように身を捩るも、絡め取られた腕はビクともせず、男たちの手にボディラインをくまなく蹂躙されてしまう。
尖り立った乳首を別々の男につままれ、クニクニと転がされながら引っ張られる。突き

抜ける肉悦と痛みに背中を跳ねさせると、その瞬間、淫裂に忍び込んだ指先がグチュリ……と水音を響かせ、柔らかな媚粘膜を舐めるように擦ってくる。
「うっへぇ……野外オナニーで濡らしてるとか、相当な淫乱だな、ネーちゃんよ……」
（ち、違います、そんな……それは、汗……でっ……んっくふぅぅっ！）
ヌルヌルとまとわりつく感触とともに、男の指先が膣口の上を擦り上げながら、敏感な豆急所を軽く弾いた。下腹部にドクッと響くその衝撃を感じた瞬間、お腹の奥深くからトロォ……と粘液の感触が溢れたのに気づき、愕然としてしまう。
（ひぃぃっ……や、ど……どうし、てぇ……んぁっ、あはぁぁ……）
「いやぁ、敏感な身体だねぇ……さ～て、一回イッちまおうかぁ？」
指先に絡む淫蜜を目の前に広げられ、カァァッと顔が耳まで真っ赤に染まる。それを見た男たちはますますヒートアップし、身体を嬲る手の動きを激しくさせる。
「んはあぁぁっっ、やぁっ、や……ひゃめっ、くひぃぃっ！」
もはや声も押さえられず、ブラウスの隙間から滑り込んだ指に直接乳首を扱かれ、優しくも粘着的な手つきで陰唇を掻き回され、淫豆をつまんで擦り上げられ――羞恥と肉悦に蕩け切った身体が、急速に開いていくのを感じさせられる。
（やっ、な、んでぇ……ひぅぅっ！　キ、キサラ、ちゃんの、とき、よりぃ……）
「へへぇ、どうだ？　こんだけの人数に責められっと、めちゃめちゃ感じるだろが？」

抵抗できぬままで複数の男から受ける愛撫が、快感を何倍にも引き立ててくる。女扱いに慣れているのか、男たちの責めは的確に性感帯を突き刺し、緩急をつけたタッチで肉悦を全身に広げてしまう。

「あっ、あぁぁっ、もうっ、だ、めぇぇ……んひっ、いっ……ひぃぃぃ――っっっ！」

ビクビクビクッと小刻みに身体中を痙攣させ、頭の中が蕩けてしまうような、甘く切ない感覚が染み込んでくる。以前感じさせられたのとまったく同じ――イクという恥ずかしすぎる状態に強制的に追い込まれた屈辱と恥辱に、ガクガクと腰から下が震え、男の指の間で乳首がカチカチにそそり立っていくのが、自分でも感じられていた。

（う、そぉ……です、こん、なぁぁ……んひっ、いぃぃ……み、見られて……お店の、中なのにぃぃ……あんっ、んっ、くぅぅぅ……）

快感に浸って脱力する身体は抵抗できず、抱き寄せられても動くことができない。

「お～、いいイキっぷりだねぇ」

「外の連中も喜んでるぜぇ？　そんんじゃ、続きといこうか……へへへ」

（っっっ⁉　そ、そんな……もうイヤですっ、こんなのっ……やめてくださいっっ！）

大粒の涙を瞳に浮かべ、身体を抱え込もうとするメルティーナ。けれど男たちは許さず、その腕を押さえつけようとして――。

「いいだろ、もっと気持ちよくしてやっから――ぬぐぇぇっ⁉」

突然、意味不明の声をもらして、その手を何者かに捩り上げられる。
「――いい加減にしたらどうですか？　その人もう、嫌がっているじゃないですか」
そして響くのは、少女の……いや、少女と聞き違うような少年の凛々しい声――。
「あぁん？　なんだってんだ、いきなり……？」
別の男が声のほうを振り返ると、線の細い少年が力強い視線で、メルティーナのことをまっすぐに見つめていた。
「やめておいたらどうですか、って言ってるんですよ。よくはわかりませんけど、その人は事情があって、そんなことをさせられているようですし」
「うるせぇっ！　いまいいとこなんだよ、ガキは引っ込んでろや！」
邪魔されたことで気を悪くした男の一人が少年に近づくと、大声で怒鳴りながら、腕を振り上げて問答無用で殴りかかる。
「っっ……や、やめてあげてくださいっ！　その人は関係ないじゃないですかっ……」
「――大丈夫ですよ、メルティーナさん」
「え……？」
慌てて止めようと声を上げたメルティーナだったが、驚いたことに少年は自分の名を呼んでそれを制し、振り下ろされる男の拳を落ち着いた様子で受け止める。
「一応、警告はしましたから……悪く思わないでくださいね」

「なっ……おごふぅぅぅっ!?」
目にも見えない、とはこういうものを言うのか。気がつくと、座ったままの少年が突きだした拳が男の腹部に突き刺さり、情けない悲鳴とともにその身が崩れ落ちてゆく。
「……逃げるならいまのうちですよ、皆さん？」
「ひぃぃっ、は、はいぃぃっ！」
倒れた男の仲間が彼を支えて走り去ると、他の男たちも我先にと泡を食って逃げだしてゆく。周囲から眺めていた客たちもポカーンと口を開けていたが、やがて一人、また一人と気まずくなったかのように席を立ち始める。
「……いけない、やりすぎちゃったなぁ……」
営業妨害とか言われたらどうしよう――そんなことを少年が口にしたところで、後に残されて呆然としていたメルティーナはようやくハッと我に返り、急いで少年に駆け寄る。
「だ、だだ、大丈夫でしたかっ!?　あの、お怪我とか、そういうのは……あ、私の家、すぐそこですからっ、手当てとかできますけど！」
アワアワと身振り手振りで説明しながら、なんとなくハンカチなどをだして少年に差し出してみると、キョトンとしていた少年は相好を崩して笑いだす。
「ぷっ……あははっ！　いえ、平気です……一般人に手をだすのはあれでしたけど、こっちが怪我するってことはあり得ませんから……ありがとうございます」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

仙獄学艶戦姫 NOBUNAGA!

ノブナガッ! comic

待たせたな

信長が、秀吉が、義元が、エッチにバトルにと漫画で大活躍！
もうひとつの『仙獄学艶戦姫ノブナガッ!』がここにある!!

毎月中旬
発売!!
18歳未満の方は
購入できません
18

漫画：老眼
原作：斐芝嘉和
キャラクター原案：SAIPACo.

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス
『闘神艶戯』偶数号にて連載中！

編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208
http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円(税込)

思春期なアダム4 聖域の崩壊

[小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃]

全国書店で好評発売中

少女天使の暴走が平和な学園生活を破壊する!!

シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

呪詛喰らい師2

[小説:蒼井村正／挿絵:或十せねか]

全国書店で好評発売中

凄腕退魔士の咲妃を牝奴隷に堕とす新たな敵の登場!

魔海少女ルルイエ・ルル2

[小説：羽沢向／挿絵：ピエ～ル☆よしお]

全国書店で好評発売中

クトゥルフの娘たちが学園祭でメイドさんに変身!?

ルルたちに新たな邪神が這い寄る!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガッ! ①～③
- ビルグリムメイデン ①～③
- 不死の吸血鬼がHSのご主人様を募集しているようです
- 思春期なアダム ①～③
- 呪詛喰らい師[カースイーター]
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!
- 借金お嬢クリス ①～③
- 無敵の姫騎士がHMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ! あとみっく文庫 検索

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！
第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園――西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!!　平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで――!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 弐
北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾〈美姫〉景虎、宇佐美〈奈々〉定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!!　敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 参

信玄、出陣！

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

BLANGEL

輪になりて踊る愚者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●夜士郎
原作・挿絵●渡瀬行人

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田睦月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！　ごく普通な少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する!

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

思春期なアダム2 背後をねらう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、睦月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！“蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、睦月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

借金お嬢クリス
42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円！　クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに！　果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス2
42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!?　水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍（?）に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト http://ktcom.jp/

title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』 トキサナ

『ドSの流儀』 chaccu

『生徒会長前哨戦?』 天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中!

※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!